

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 吉富 朝子



学位申請者 グエン・ティ・ミン・ヴァン

論文名 通訳・翻訳プロセスモデルの検討
そのプロセスにおける明晰化ストラテジーを中心に
—ベトナム語—日本語の通訳・翻訳の場合を事例として—

【結論】

グエン・ティ・ミン・ヴァン氏から提出された博士学位請求論文「通訳・翻訳プロセスモデルの検討：そのプロセスにおける明晰化ストラテジーを中心に—ベトナム語—日本語の通訳・翻訳の場合を事例として—」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

審査委員会は、主査として吉富朝子、副査として主任指導教員の早津恵美子教授、谷口龍子准教授、今井昭夫教授、川口健一本学名誉教授、そして協力者として内藤稔講師を加えた6名で構成された。

【論文の概要】

本論文は、ベトナム語—日本語間の通訳・翻訳過程に見られる「明晰化ストラテジー」についての実証研究である。ビジネス場面におけるベトナム語—日本語間の通訳・翻訳データを収集し、通訳・翻訳過程に生じる語彙・文法・談話上の問題解決の方略として明晰化ストラテジーが、訳出者・訳出方向によってどのように使用されているのか、また通訳・翻訳過程間でストラテジー使用にどのような違いがあるのかを考察した。明晰化ストラテジーの特徴は必然性、活用レベル、使用目的の3つの観点から分析され、17種類から成る分類が提案された。併せて、訳出者の意図を確認するためのフォローアップ・インタビューと、訳出結果を第三者がどのように評価するか、明晰化ストラテジーの効果を検証するためのアンケート調査を行った。理論面では、意味理論を議論の出発点とし、スピーチ産出モデルや、複雑性理論といった理論的な枠組みに基づいて独自の通訳・翻訳プロセスモデルを提案し、通訳・翻訳過程に見られる明晰化ストラテジーの使用データによる検証を行っている。

本論文は全 10 章から構成されている。

第 1 章では、先行研究を概観し、研究目的と意義を述べている。また本研究の背景理論として Seleskovitch (1968,1978)の「意味理論」(Theory of Sense)を取り上げ、この理論の評価と批判を踏まえて、Levelt (1999)の「スピーチ産出モデル」(Speech Production Model)および Larsen-Freeman & Cameron(2008)の「複雑性理論」(Complexity Theory)に基づく独自の通訳・翻訳プロセスモデルを提言している。このモデルでは、訳出過程が複雑で動的な性質をもち、言語外のさまざまな要因の影響を受けるとともに、言語的にも語彙・音声・文法・語用論のレベルでの訳出時の判断が複合的に関与していることが示された。本章ではまた、研究設問を提示し、明晰化ストラテジーの使用実態を明らかにすることで、実証データによる通訳・翻訳プロセスモデルの検証を試みるという研究目的が述べられている。

第 2 章では、本研究で扱う明晰化ストラテジーの定義及び分類方法を紹介している。明晰化ストラテジーは必然性、ストラテジーの活用レベル、使用目的という 3 つの観点から分析が行われた。必然性の観点に基づく分類では、「義務的なストラテジー」と「任意的なストラテジー」、ストラテジーの活用レベルの観点に基づく分類では「文法レベル」「語彙レベル」および「談話レベル」のストラテジー、そして使用目的の観点に基づく分類では「意味明確化のため」と「目標テキストの自然さの確保のため」のストラテジーが認められた。加えて本章では、明晰化ストラテジーを左右するさまざまな要因の考察を行い、特に訳出形態（通訳過程対翻訳過程）と、ベトナム語－日本語間の言語特徴の相違を、考察すべき重要な変数として挙げている。

第 3 章では、調査方法が説明されている。データ収集をするために、なるべく本物に近いビジネス場面を設定し、シミュレーションという形で通訳データを収集した。翻訳データについても通訳と同様のビジネス関係の内容の文書を翻訳させた。通訳経験のある被験者 6 名が通訳・翻訳をともに行った。データの信頼性を確認するために被験者のフォローアップ・インタビューも行い、通訳対翻訳、訳出方向、各通訳者の間に見られた明晰化ストラテジーの特徴の相違に、どのような要因が関わっているかを探った。さらに明晰化ストラテジーの効果を検証するために「日本語がわからないベトナム人」、「ベトナム語がわからない日本人」、「日本語・ベトナム語に精通するベトナム人」計 60 名を対象に、原文と訳出結果を示し、ストラテジー使用の評価をってもらうアンケート調査を実施した。

第 4 章では、明晰化ストラテジーが 17 種類に分類されること（主体の明示化、前置き表現の活用、原文の構成変更、反復、性別の明示化、指示語の意味明確化、指示語の付加、暗示された情報の復元、程度副詞の付加、説明の追加、複数の類義語の活

用、接続詞の付加、読み手・聞き手に馴染みのあるような表現への変換、テンス・アスペクトの変換・具体化、原文の不自然さに対する処理、形式名詞の具体化、英語（表記）の併用による誤解防止）が示され、分類毎の実例が挙げられている。

第5章は、通訳データに着目し、通訳者による明晰化ストラテジー使用の類似点・相違点の分析結果を考察している。通訳者によって明晰化ストラテジーの活用傾向は、活用頻度や活用特徴において大きく異なるいっぽうで、通訳者間で共通の全体的な傾向があることも判明した。共通する特徴としては、明晰化ストラテジーの大半が任意的な性質をもち、文法レベルの活用が少なく、談話レベルでの活用が多いこと、また主な使用目的が意味の明確化のためであるという結果が報告されている。通訳者へのフォローアップ・インタビューによる意識調査からは、明晰化ストラテジーの使用が、訳出場面毎の通訳者の判断・意図によるところが大きいということが明らかになった。また、ベトナム語→日本語方向の通訳における明晰化ストラテジーの出現頻度が、日本語→ベトナム語方向の通訳における出現頻度を上回っていること、対して明晰化ストラテジーの義務的使用率については、日本語→ベトナム語方向が、ベトナム語→日本語方向を大きく上回っていることも示された。その要因として考えられるのは、義務的な性質が強い「主体の明示化」と「読み手・聞き手に馴染みのあるような表現への変換」という2つのストラテジーが、日本語→ベトナム語方向の通訳においてより多く活用されたためであると分析している。

第6章では、翻訳データに着目し、翻訳者による明晰化ストラテジー使用の類似点・相違点の分析結果を考察している。翻訳者全員に共通して活用割合が高かったのは、「主体の明示化」と「読み手・聞き手に馴染みのあるような表現への変換」である。「原文の構成変更」、「説明の追加」、「テンス・アスペクトの変換・具体化」も全体的に比較的高い割合を示しているが、翻訳者間で使用率に顕著なばらつきが見られた。ストラテジーの使用目的については翻訳者全員が共通した意図を持つが、ストラテジー使用の必然性の認識については翻訳者間に違いが見られた。この他、翻訳者による明晰化ストラテジーの活用レベルや、翻訳方向による明晰化ストラテジーの出現回数、明晰化ストラテジーごとの活用特徴については大きな違いが観察された。「英語（表記）の併用による誤解防止」、「形式名詞の具体化」、「性別の明示化」並びに「主体の明示化」は、日本語→ベトナム語方向の翻訳にのみ現れた。これは、ベトナム語・日本語間の言語学的なちがいに起因する結果である。

第7章では、通訳過程と翻訳過程における明晰化ストラテジーの使用を比較分析している。その結果、訳出形態を問わず、共通する最も大きな特徴は、通訳過程において普遍性が高いストラテジーである「説明の追加」、「原文の構成変更」の使用が

顕著である点であった。対して、「性別の明示化」、「指示語の意味明確化」、「指示語の付加」、「程度副詞の付加」、「英語（表記）の併用による誤解防止」のための明晰化ストラテジーは全体的に出現率が低かった。いっぽうで、通訳・翻訳過程間に見られる違いは、活用された明晰化ストラテジーの種類・明晰化ストラテジーの種類別の出現割合・ストラテジー使用の必然性・活用レベルのすべてにおいて観察され、特に必然性という観点では、通訳において活用された明晰化ストラテジーが任意的なものが大半を占めたのに対し、翻訳において活用された明晰化ストラテジーでは義務的な使用率が任意的な使用率を上回ったことが示された。

第 8 章では、明晰化ストラテジーの使用が、訳出結果を読んだ人から、どの程度効果的であると判断されるかについて、アンケート調査の結果を分析・考察している。通訳・翻訳に対する評価の平均点から、明晰化ストラテジーが全般的には肯定的な効果をもたらすものだと判断できた。また、通訳と比べ翻訳に対する評価点が良い傾向だった。ただし、調査対象者によって評価が分かれたストラテジー使用も多くあった。評価が最も良かったのは、「日本語がわからないベトナム人」グループで、最も厳しかったのは「日本語・ベトナム語に精通するベトナム人」であった。この結果、明晰化ストラテジーが通訳過程において果たす重要な役割が確認できたいっぽうで、明晰化ストラテジーが訳出の受け取り手にとって必ずしも評価されず、その効果が認められない場合もあることが明らかとなった。

第 9 章では、分析結果と考察の総括を行っている。研究設問への解答をまとめるとともに、今回分析対象とした通訳データに見られる明晰化ストラテジーの事例が、第 1 章で提案された通訳・翻訳プロセスモデルによって説明可能であることが示された。さらに、ベトナム語-日本語に特有な通訳・翻訳プロセスモデルの提案も行っている。

第 10 章では、研究成果の学術的・実践的意義についてまとめ、調査結果から得られた示唆を今後のベトナム語-日本語間の通訳者養成に活かす提言がなされている。最後に本研究の限界について述べ、今後の研究の方向性を提示している。

【審査の概要及び評価】

ヴァン氏の博士論文公開審査は 2017 年 12 月 11 日に行われた。まずヴァン氏から論文の要旨が約 30 分間で発表され、続いて約 90 分間の質疑応答が行われた。

ヴァン氏の博士論文は以下の点において高く評価された。

1. ベトナム語-日本語間の通訳研究・翻訳研究とも、先行研究がほぼ存在しないことから、先駆的な実証研究として貴重な研究成果である。

2. 通訳研究と翻訳研究の両方を試み、両者の違いについても検証したのは果敢な取り組みであった。

3. ベトナム語－日本語間の膨大な訳出データを収集・分析し、明晰化ストラテジーの分類が提示できたことで、記述研究としても価値の高い論文である。

4. 通訳研究では、未だ記述研究が中心で、研究分野独自の理論構築が開拓途上であるが、本論文では独自の通訳・翻訳プロセスモデルを提示することで、当該分野の理論的発展にも貢献した。

5. 通訳過程における明晰化ストラテジーの使用という切り口で、独自理論の提唱と検証から、実証データの収集と分析、被験者のフォローアップ・インタビューによるストラテジー使用の意識調査、訳出結果に対する効果を評価するアンケート調査、さらには通訳者養成の実践面に対する提言に至るまで、総合的かつ包括的な研究を実現しており、研究者の視野および展望の広さが伺える論文である。

6. 本論文の調査を礎に、今後発展的な研究の実現が大いに期待できる研究内容である。

いっぽうで、ヴァン氏の博士論文について、以下の問題点が挙げられた。

1. 通訳過程と翻訳過程の両方を研究対象としたことは評価できるいっぽうで、研究対象範囲が非常に広がることから、どちらかいっぽうに絞るという選択肢もありえたのではないかと。

2. 明晰化ストラテジーの使用が許されない法廷通訳等との特徴の違いが考察されていない。また、本調査の被験者となった通訳者は3年以上の経験者であったが、より経験を積んだベテラン通訳者との違いも考察されるべきだった。方法論の章でも被験者の通訳歴や技能等に関する情報が十分に述べられていない。

3. 明晰化ストラテジーの分類は細かくリストになっているが、ストラテジーの階層化を試みるべきだったのではないかと。分類には言語類型論上の違いから生じるストラテジーとそうでないストラテジーが混在しているが、両者を区別し、前者については省いても良かったかもしれない。

4. 従来の研究に見られる明示化ストラテジーに対して、本論文で明晰化ストラテジーを定義し、分析対象としたことによる研究への貢献がどのような点なのかが不明瞭である。明示化ストラテジーを分析する場合との違いがより明確になると良かった。

5. 今回は明晰化ストラテジー使用における言語的側面に着目しているが、訳出場面における非言語的要因の影響についての考察までは及んでいない。例えばビジネス場面ではクライアントへの配慮などがストラテジー使用を左右することが考えられる。

6. 同じ場面で明晰化ストラテジーを使用した訳出者と使用しなかった訳出者がいた

場合、使用しなかった場合の例や理由が十分に考察されていない。その他、起点言語のメッセージのわかりにくさを補足するためにストラテジーが使用された場合と、起点言語のメッセージ自体に問題がないものの訳出者がミスを行った場合の区別や、「反復」など、意識的なストラテジー使用かミスによる言い直しなのか判断が難しい事例において、ストラテジーの特定方法に若干問題があるように思える。

7. 理論面の議論と実証面の議論とがやや乖離している印象を受ける。理論の検証をするならば、特に複雑性理論の実証には質的な事例研究が必須であるが、今回は通訳者のフォローアップ・インタビューにとどまったのが惜しい。

8. ベトナム語－日本語間の通訳・翻訳者養成において、理論的な側面と実践的な側面をどのように結びつけて指導するといいのか。ベトナム語→日本語方向と日本語→ベトナム語方向とではどのような指導上の違いが考えられるか等、教育実践面での議論をもう少し深められると良かった。

これらの指摘に対し、ヴァン氏は問題点に真摯に向きあい、今後の研究において本研究の限界を改善し、研究を拡大発展していく具体的な方法について考えを述べた。審査委員も、問題点はいずれも今後の研究につながる課題であり、研究の将来的な発展の可能性を示すものであることから、本論文の学術的価値を否定するものではない、との見解で一致した。ヴァン氏はこの他の細かな質問や、データフォーマット上のミス等の指摘に対しても、明確で誠実な回答を行った。

以上の論文評価および最終試験での質疑応答の内容から、本論文はベトナム語－日本語間の通訳・翻訳研究として、理論面・実践面の双方に大いに貢献する秀逸な論考であり、ヴァン氏が優れた研究者としての資質を十分に有していることが確認された。よって審査委員会は全員一致して、学位申請者グエン・ティ・ミン・ヴァン氏が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。